

# 埼玉県日高市 寺田 治さん

## 叔父のネルシャツ、ジーパン姿に憧れて酪農家になった。

291  
チャレンジ  
ザ・酪農

### 牛へのご褒美として全牛能力証明、 体審を受けています。

～寺田さんが加藤牧場で働くようになった経緯は。

社長は叔父に当たります。自分はサラリーマンの家庭で育ちましたが、正月などは家族で遊びに来ていました。自分は牛が好きでしたので、ちょくちょく来て叔父の話などを聞いていました。社長のところは3人娘で跡継ぎがないので、おまえうちに来ないかと言われたのです。その時の叔父の酪農をしているネルシャツにジーパン姿がかっこよくて、憧れもありました。

それで叔父の薦めで埼玉県の農業大学校に2年間進みました。その後これも叔父に薦められて、アメリカ・ワシントン州の牧場で1年間実習しました。実習先はスコビーオーを生産したロッカリー牧場の近くで、搾乳牛も80頭ほどいましたが、ロッカリーから育成牛を預かるような、育成がメインの牧場でした。自分は搾乳担当として働きました。1年間で搾乳技術などを身につけて戻ってきたのです。もうここで20年になるのですね。

加藤牧場はもともと所沢で始まっています。社長の父親が戦後、飛行場の跡地を開墾して農業を始め、54年に国の奨励で牛を導入したようです。社長が大学生だった65年に牧場を引き継ぎ、69年にここ日高市に移転しました。92年に有限会社となりフリーストールやミルクングパーラーを設備しました。自分は95年から加わりました。

社長は猟犬のブリーダーをしていた事があり、その影響もあるのですが、牛も血統や掛け合わせ、そして登録が大切だと、70年から「ムサシ」と冠名を付けて全牛登録しています。社長曰く「牛も社員と同じなんだ。一生懸命働いてくれているなら、その牛たちにご褒美として審査を受けて、検定記録を取ってあげなければ。それが牛たちの勲章になる」と言うのです。自分も大賛成です。もし、たいては働かなかった牛でも初産に娘産んでいて、孫娘から

高能力の牛が出てくるかもしれない。だから成績が良い悪いで区別せずに全頭能力証明、体審を受けています。

～牛の導入も社長自ら市場に出向いていますね。

北海道の十勝市場に行って買う事が多いのですが、初妊牛はもちろんですが、夏場の搾乳牛不足に最近は経産牛を買ってきます。2産、3産目の牛を。これらが意外と活躍してくれています。中には乳房炎等の牛もいますが、初妊より安いですからね。いきなり60kgとか出る牛もいますよ。

社長は昔から家畜商の言いなりや、人任せで牛を買った事はないそうです。ほとんど自分が見て決めます。見ないで買ったのはマガジン誌を見て購入した小椋牧場のスイーテーカーくらいですね。この娘が昨年の関東BWで2オシニアで2位になりました。

～加工プラントを始めた経緯を教えてください。

プラントを始めたのは社長が自分の乳質に自信があったからだそうです。毎年生乳品質共励会で最優秀賞をいただくほどですから。この牛乳を周りの人たちに飲ませたいなどの思いで始めました。そのためには繋ぎの汚い牛舎じゃ駄目だ、見栄えの良い綺麗なフリーストールにしなけりゃと思い、フリーストールを建てました。当時は本当に綺麗でしたよ。

プラントを始めた当初は社長自らが牛乳を配達したり、全国各地のイベントに製品を売り込みに行っていました。今は社長の娘3人が中心となって製品作りを行っています。

～加工プラントを持っているので気を遣う事も多いですね。

搾乳体験を月に1、2回開催して、地域の子供たちに牛とふれあえる機会を作っています。製品の販売を直接する事によって、緊張感が出ますね。店のスタッフやお客さんが牧場を見に来ますから、意識としてもっと綺麗にしくちゃいけないなど。目標はカナダのブリーダーの牧場のように、まるで公園のような景観にしたいというの